寺報は無料、不要の方は一報下さい。

第２１９号

龍源寺報

平成３０年　春彼岸号

臨済宗・妙心寺派
住職　松原信樹
佛母寺住職　松原覚樹
正福寺住職　松原行樹
TEL　3451－1853
FAX　3451－6094

振込 00160-0-104918　東京都港区三田５丁目９－23（郵便番号 108－0073）
Email: info@ryugenji.com　URL: http://www.ryugenji.com

春彼岸におもう

松原　信樹

七人家族で育ち、祖父母と父を看取り感じたことは、生きているということは、まだ、なすべきことを残しているということだとつくづく感じている。そして、生きていて、足りないものが、もし、あるならば、足りないものを充足させようという運動が心に興り、その充足させようという情熱のようなものが存続している時は、人は幸福感に浸っている。ただ、それが自分には不可能であるという自覚が伴った時、人は、そのまま不幸の意識に転じてしまう。例えば、野球を目指している人全員がイチロー選手になれるわけではない。上を目指して、そういう立派な選手と比較をしてしまうから挫折を感じてしまう。だったら横の軸で考えてみたらどうだろう。私は、幼少の頃、ピアノ、バイオリン、体操教室、剣道、サッカー、野球と習ってきた。どれも縦軸ではトップになれなかったが、横軸の裾野が広がったおかげで、多くのことを趣味として楽しんでいる。

人間は生きている限り、終息した安定のようなものは、なかなか続かないから、長く修行した和尚さんでも、「おれの修行はまだまだ続く」というし、祖父・泰道師は、百歳を越えても「生涯修行・臨終定年」と色紙で揮毫したのであろう。

もし、「難破しながらも、よく航海した」というような多くの困難な道を努力して生き抜いてきた人がいても、達成感の中でしばらくの間は安らかな気持ちでいると思うが、そうした人は、恐らく、再び新たな取り組みに立ち向かうのではなかろうか。すくなくとも、私自身もそうだし、そのような方々にたくさん接してきた。

普段生活をしていても、予期せぬ災害、事故、不運があり、泰道師が「生きつつあることは、死につつあることである」というように、もし、自分に突然臨終が来てしまったら、「これでよい」と臨終を受け入れることができるであろうか。もし、「これでいいんだ」と、この世を去ることができたとしたならば、その人は、自分の中で、みずからの限りある人生を生ききり、与えられた仕事を果たしたことになろう。もし、そうならば、私だったら自分のいのちの活動とその全ての奇跡を、感謝とともに、縁をいただいたり、いのちを授けてくれた仏さまや観音さまに捧げ返したい。ただ、お迎えがくるまでは、授けていただいたいのちで精一杯皆さんのためになるよう精進していきたい。今後とも宜しくお願い申し上げます。

寄付

本堂改良工事　エレベーター増設

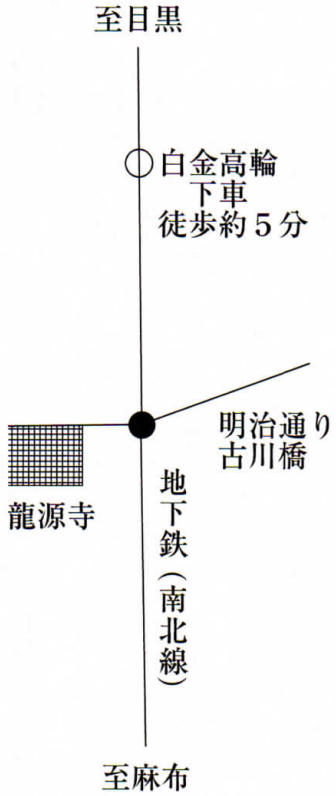
金一千万円也　石井公一郎殿
金一千万円也　石井タマ子殿
金五百万円也　匿名殿
金五百万円也　匿名殿

かんのんさまに

金三万円也　勝田明子殿

ありがとうございました

※将来は、本堂の裏地を整理して、大般若経を納める経蔵を建立する計画をしております。



春彼岸会

左の通り行います。ご家族そろってお参りください。

一、三月二十一日（春分の日・午前十一時より）
一、読　経
一、法　話

※駐車場はありません。南北線をご利用ください。

龍源寺への交通の便（地下鉄）

● 都営三田線
（目黒または三田、南北線は白金高輪駅下車。徒歩五分）
● 2番出口から地上に出ると案内看板に「龍源寺」名あり

龍源寺への交通の便（都バス）

● 田87　渋谷駅―田町駅　魚ラン坂下下車
● 都06　渋谷駅―新橋駅　古川橋下車
● 品97　品川駅―新宿駅西口　魚ラン坂下・古川橋下車
● 反96　五反田駅―品川駅―六本木ヒルズ（循環）　魚ラン坂下・古川橋下車
● 東98　東京駅丸の内南口―目黒駅　魚ラン坂下下車

龍源寺の歴史について（十一）

松原　泰道

明治の後半から荒れはてていた龍源寺の本堂の改築は、ついに出来ませんでしたが然し昭和二年の大修理で寺としての面目を取り返すことが出来ました。それだけに当時の住職祖来和尚と檀家総代の中沢六之助、飯田平作、梅田又八氏らの苦心が察しられます。

昭和二年十月十五日に改装のできた本堂で開山越溪大和尚二百五十年遠忌の大法要が営まれました。大導師は、松島瑞巌寺の盤龍老大師でありましたが、老師は当日の印象を謹厳な筆体（原漢文）で

南嶽祖来和尚は俗姓葛谷氏。濃州徳田郡の人。幼にして出塵の志を発して尾張の清水寺月鑑大和尚について得度、また美濃の江月要明先師について内外の聖典を学ぶ。美濃の瑞龍滴翠老師に参ずること十余年、その蘊奥を極む。たまたま東京に遊び龍源に到り、堂の荒れたるを見て大いに悲嘆し、復興の志願を発して遂いに留まる。時に食せんとするも米麦の器皿もなく、寝んとするも蒲団なし。朝暮の苦しみ、言語の及ばざる所なり。ここに経営苦辛幾多年、漸く苦海をこえて本堂大修繕と書院一棟を新造して大いに旧観を改む。また一切の什具みな完備す。実に中興というべし。開山大和尚遠忌の法式の厳正なること実に人天も感ずるところ、予、幸いに因縁あって法席に列す。その概略を記して後鑑となす。

昭和二年十月

瑞巌百二十六世盤龍識

と書き残されました。

又、その日の老師の香語は「嶺を越え溪を渡る了祖の禅、王侯帰服して因縁を結ぶ、瑞雲甘露今古なし、二百有余五十年」でありました。当時、老師は八十才のご高齢でありましたが元気に大導師をおつとめ下さいましたのはありがたいことです。

龍源寺の大修繕を果たし、住職する以前の寺の借財も滞りなく返済した祖来和尚は、昭和十一年元旦の暁に卒然として亡くなりました。六十六才の正月を迎えた直後でありましたが、生涯を〝コマの舞いだおれ〟〝路傍の石〟を杖ことばにして、自他に共に厳しく生きた和尚でした。和尚をご記憶のお方もまだたくさんおありです。その七日に私は本山から後任住職に任命されました。

それからの後は皆さまご承知の通りです。日華事変から第二次世界大戦となり、寺は幸いに戦災を免れましたが、戦病死の檀信徒六名、寺の醇一もサイパンで、義母よねも私の出征中疎開先きで戦災死をとげました。

花柳紅緑

春彼岸を迎えます。本堂エレベーター増築工事に高額の御寄付をいただき、ありがとうございました。お檀家さまの皆さまが、龍源寺で安心してお参りできる環境を作っていくため、大切にお金を使わせていただきます。深く感謝申し上げます。また、この度の東側の隣接地の開発、そして、本堂エレベーター工事に建築家の山本哲也先生に大変お世話になっております。改めて、御礼を申し上げる次第であります。順調にいけば、七月十日の盂蘭盆会法要には完成できるのではとの見通しです。龍源寺は、平成三十七年に開創三百五十年を迎えます。それまでに、築五十年である本堂の改良工事、納骨堂をはじめとする墓地の整備、経蔵をはじめとする境内地の借地の整備を進めていきます。龍源寺南側の再開発が予定されている中で、寺院らしい景観を保たせるため、皆さまのご支援・ご協力をお願い申し上げます。▼三月四日から十五日まで、和歌山県の白浜に巡教といって、約二十ヶ寺のお寺にうかがわせていただき、一日、二ヶ寺のお檀家さまに法話をさせていただきます。また、『大法輪』三月号に、「仏事についての疑問」を執筆させていただきました。巡教も執筆も泰道和尚、哲明和尚のようにはいきませんが、一歩一歩歩んでいきたいと思います。▼母は三月十七日に、民生委員・児童委員として、区民生活の安定と社会福祉の増進に尽力をした人ということで、区政功労者として、表彰されました。一〇一歳で同居している母の実母が、一月、境内で転倒し、大腿骨を骨折したため、病院で入院しています。四月半ばに龍源寺に戻りますので、その迎える準備をしています。妻の亜矢は、子育てに一生懸命です。娘の瑞樹もまだ、お話しができないながらも大人の言う事を自分なりに理解しようとしているようです。おかげさまで、風邪もひかず元気にしています。お掃除でお手伝いいただいている渡辺幸二君もきれいに境内を掃除していただいております。▼泰道和尚が昭和四十二年に記した「龍源寺の歴史」が、今号で最終回となりました。本堂が新築されるまでの軌跡のようなものを感じながら昔を回顧し、今できることを摸索しています。▼病院からの流れの中で決まってしまうケースが非常に多いようです。お檀家さまでお葬式をだされる場合、信頼のある葬儀社を紹介させていただきます。病院で臨終の際、まず一番はじめに龍源寺か、深夜でしたら、「あおば葬祭」〇三-五七二二-七六五一（東京都目黒区下目黒五-七-一）に、お電話を入れていただきたいと思います。目黒区にある「あおば葬祭」は、丁寧なお仕事で皆さまに大変喜ばれています。葬儀、家族葬、密葬など気軽にご相談下さい。生前のご相談も受け付けています。▼三月二十日午後一時より、ちらし寿司のお野菜のきざみを行います。お手伝いいただける方、宜しくお願い申し上げます。三月二十一日午前十一よりお彼岸会でお会いできることを、寺族一同楽しみにしております。ご家族でお参りください。（信樹）